

ボランティア活動における学生の意識変容について（Ⅱ）

— 2年間での学生の意識変容 —

Analysis of the Change of Students' Consciousness in Volunteer Activities (Ⅱ) The Changes in their Consciousness over a Period of 2 Years

(2011年3月31日受理)

松井 みさ 谷本 満江
Misa Matsui Michie Tanimoto

Key words : ボランティア, 子育て支援, 意識変容

抄 録

中国短期大学保育学科ボランティアグループ「あっぷる」において、参加学生が在学中の2年間でどのように意識変容したか1年次・2年次のアンケート調査を元に検討した。その結果、主体的に関わっていなかった学生は、大きな意識変容に繋がらなかったが、ボランティア活動を継続して行った学生の多くは、現場に役立つ力、学生自身の成長、学校生活などで意識変容が見られた。一部、変容につながらずポイントが下がった学生に関しては、原因を追及した。原因の一つとして性格的なことや、意志と心が伴わず、力を発揮する場面のちがいも確認できた。特にリーダーとして関わった学生は「現場での学び」カテゴリー、またサブリーダーとして関わった学生は「自己の成長」カテゴリーにおいて意識変容が見られた。

はじめに

中国短期大学保育学科は、平素より学生のボランティア活動に積極的支援を送っている。近年の特徴的な例として、平成19年度に発足したボランティアグループAPPLE(あっぷる)(以下あっぷると称する)の活動がある。あっぷるは学科の直轄機関として活動し、岡山県備前県民局などとの協同事業を行って来た。あっぷるのボランティア活動を通して学生がどのように意識変容するか調査研究を続けている。今回は、1年次で参加した学生が、2年次ではどのように意識変容したか調査研究したので報告する。

あっぷるのボランティア活動内容は、地域の保育園などで手遊び、ペープサート、オペレッタなどのボランティア公演である。

研究の方法

1. 平成20年度入学生で、1年次、2年次とあっぷるのボランティア活動に参加した学生に、その都度アンケートをとった。
2. アンケート内容を3つのカテゴリーに分け、合計点を元に比較検討した。

研究の結果

1. あっぷるのボランティア活動参加時期と公演規模について

表1はあっぷるのボランティア活動への参加時期と公演規模を示したものである。

表1 各年次参加時期と公演規模

	公演会場	時期	公演規模	参加学生数
第1回	岡山市立K保育園	1年次	保育園児, 子育て支援親子など 約200名	70名
第2回	倉敷市N公民館	2年次	子育て支援親子など 約50名	7名
第3回	岡山市立N保育園	2年次	保育園児, 子育て支援親子など 約200名	14名
第4回	岡山市立K保育園	2年次	保育園児, 子育て支援親子など 約200名	14名
第5回	倉敷市S保育園	2年次	子育て支援親子など 約50名	7名

第1回公演のプログラムは図1である。

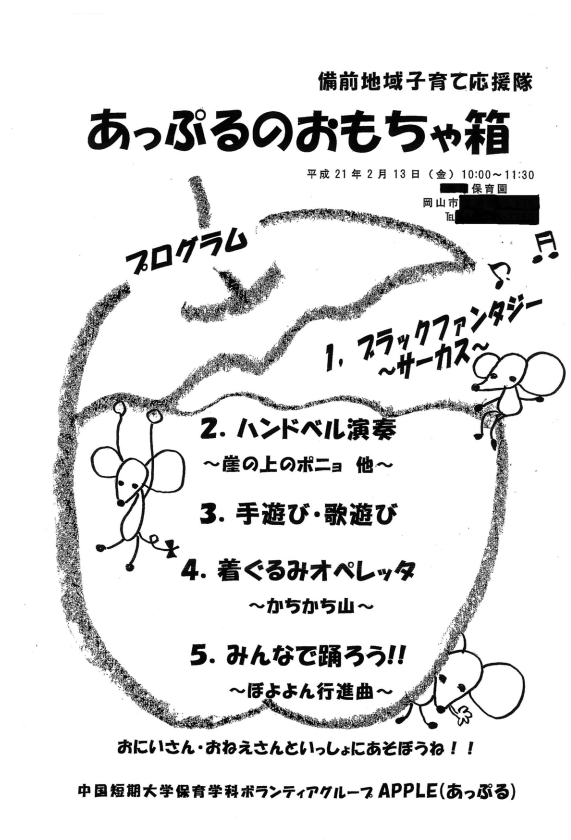


図1

2. アンケートの質問項目について

アンケートの質問は、Ⅰ. 現場で学んで欲しいことの確認(現場での学び)、Ⅱ. 学生自身の成長の確認(自己の成長)、Ⅲ. 学生生活で学んだことの確認(学生生活での学び)、Ⅳ. 全体を通しての категорияと自由記述である。

Ⅰ. 現場で学んで欲しいことの確認(現場での学び)

- ・子育て支援の方法を学んだ

- ・子どもの育ちを学んだ
- ・子どもがかわいく、関わりが楽しいと感じた
- ・子どもへの援助や関わり方を学んだ
- ・保護者との関わり方や保護者と子どもとの関わり方を学んだ
- ・関係者との関わり方を学んだ

Ⅱ. 学生自身の成長の確認(自己の成長)

- ・責任を持って行動する事ができた
- ・自分たちで企画し、実践した
- ・プログラムを終えて、達成感を感じた
- ・自己成長したと感じた
- ・もっと関わりたいと意欲が出た
- ・自分に自信が持てるようになった

Ⅲ. 学生生活で学んだことの確認(学生生活での学び)

- ・子育て支援のあり方を学んだ
- ・マナー、規律などを学んだ
- ・身体表現に関する技術が身についた
- ・造形表現に関する技術が身についた
- ・音楽表現に関する技術が身についた
- ・友だちが増えた

Ⅳ. 全体を通して

- ・自己の課題が明確になった

上記の質問に対して次のように評価の点数配分をした。

あてはまる	10点
ややあてはまる	7点
あまりあてはまらない	4点
あてはまらない	1点

I～Ⅲの κατηγοリーを各60点満点とする。

3. カテゴリ別合計点の比較について

あっぷるのボランティア活動参加学生の中から、のべ3回以上参加した学生7名(A・B・C・D・E・F・G)を抜き出し、1年次の点数と2年次の点数を比較した。2年続けて岡山市立K保育園ではあっぷるのボランティア活動を行っており(表1)、それに1年次と2年次続けて参加した学生がA～Gの7名である。その7名についてカ

テゴリ別合計点を出し比較したのが表2である。

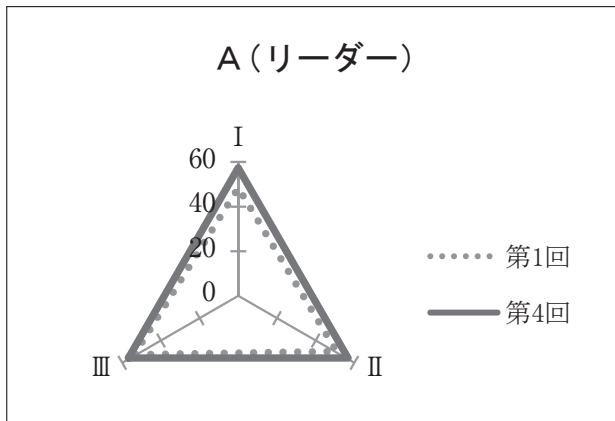
この結果、学生A, B, D, Gに関しては全てのカテゴリにおいて大規模の岡山市立K保育園でのあっぷるのボランティア活動で伸びが見られた。学生C, Eに関しては「Ⅲ学校生活での学び」カテゴリにおいてのみポイントが下がった。学生Fに関しては「Ⅱ自己の成長」カテゴリ、「Ⅲ学校生活での学び」カテゴリにおいてポイントが下がった。

この結果をグラフに表したのが、次のグラフ1～7になる。

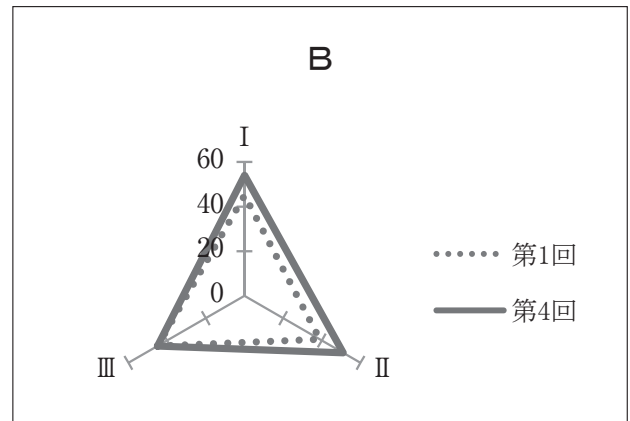
表2 カテゴリ別合計点の比較（公演会場：岡山市立K保育園）

カテゴリー	A		B		C		D		E		F		G	
	第1回	第4回	第1回	第4回	第1回	第4回	第1回	第4回	第1回	第4回	第1回	第4回	第1回	第4回
I. 現場での学び	48	57	45	54	48	57	45	48	39	42	42	42	45	51
Ⅱ. 自己の成長	51	57	39	51	54	57	45	45	42	51	48	45	45	57
Ⅲ. 学生生活での学び	54	57	45	45	51	48	42	48	45	42	51	45	48	54

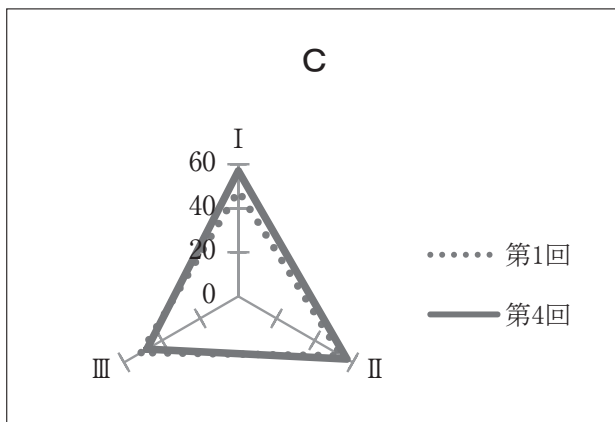
グラフ1



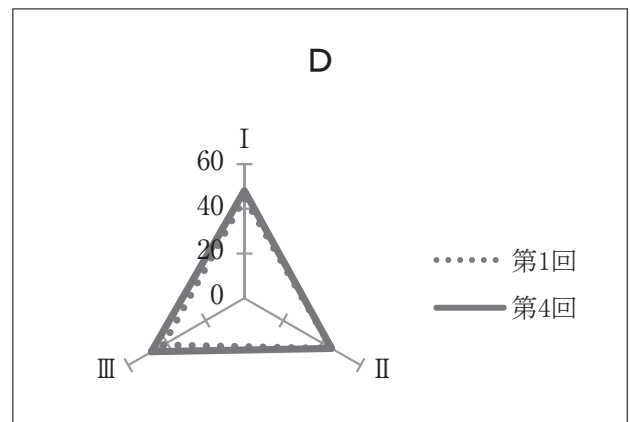
グラフ2



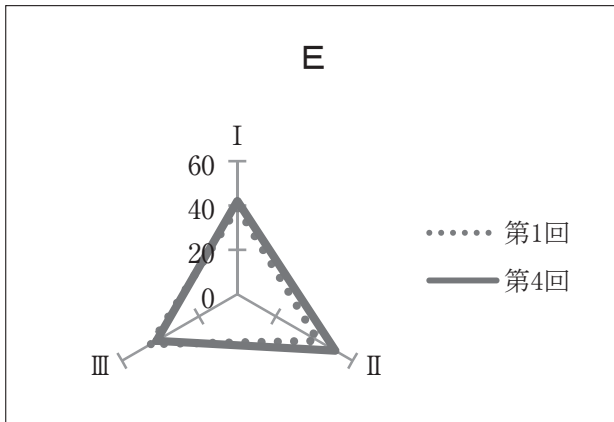
グラフ3



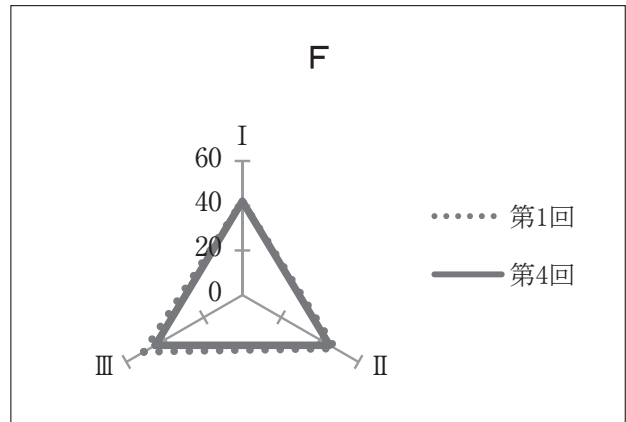
グラフ4



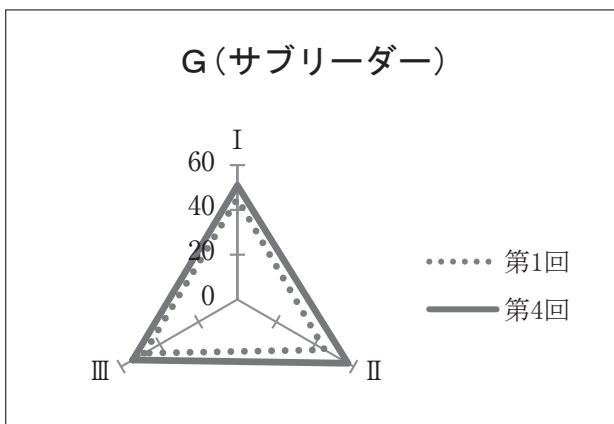
グラフ 5



グラフ 6



グラフ 7



テゴリーで6ポイント、「II自己の成長」カテゴリーで12ポイント、「III学校生活での学び」カテゴリーで6ポイントの伸びが見られ、特にIIの自己の成長がうかがえる。それらの意識変容が見られた学生Aは、2年次においてあつぶるのリーダーであり、学生Gはサブリーダーとして公演の企画・運営に大きく関わった。ボランティア活動には、要求される知識・技能・労力の提供が大切である。特に大学生は自分の抱えている関心事の重大性、确实さの試みも関与しており、さらに保育学科の学生は個人的な満足と楽しみのために活動している面もある。その結果、彼らには顕著な向上が見られたと思われる(グラフ1, グラフ7)。

考 察

保育学科の直轄機関として活動しているボランティアグループ「あつぶる」の学生に対して、各活動ごとアンケート調査を行った。今回は、在学中の2年間においてあつぶるのボランティア活動をすることにより、学生がどのように意識変容するか検討した。

表2においては、どの学生もほとんどのカテゴリーにおいて、大規模な同会場でのあつぶるのボランティア活動である第1回に比し第4回の方が点数が高く、学生の中で意識変容が起きていると思われる。学生Aは1年次も他の学生に比較すると高得点であるが、さらに「I現場での学び」カテゴリーで9ポイント、「II自己の成長」カテゴリーで6ポイント「III学校生活での学び」カテゴリーで3ポイントの伸びが見られ、特にIの現場での学びができたと思われる。学生Gは「I現場での学び」カ

しかし伸びが見られない学生C、Eは「III学校生活での学び」カテゴリーにおいて点数がどちらも3ポイント下がった。そこで、学生Cについて、点数が下がったのは何が原因か、個々の質問項目で確認した。「身体表現に関する技術が身についた」「音楽表現に関する技術が身についた」の項目において点数が下がっていることが分かった。さらにこの点を追求するために、小会場での公演第2回、第5回の点数を表3で検討した。

第2回、第5回とも50名規模のあつぶるのボランティア活動で参加学生は7名の小会場である(表1)。そこでは学生Cは「I現場での学び」カテゴリーで6ポイント「III学校生活での学び」カテゴリーで9ポイントの伸びが見られた。

さらにこの2回のあつぶるのボランティア活動についてもグラフで表した(グラフ8)。

表3 学生Cのカテゴリ-別合計点の比較 (小会場)

カテゴリ-	C	
	第2回	第5回
I. 現場での学び	51	57
II. 自己の成長	51	51
III. 学生生活での学び	45	54

グラフ8

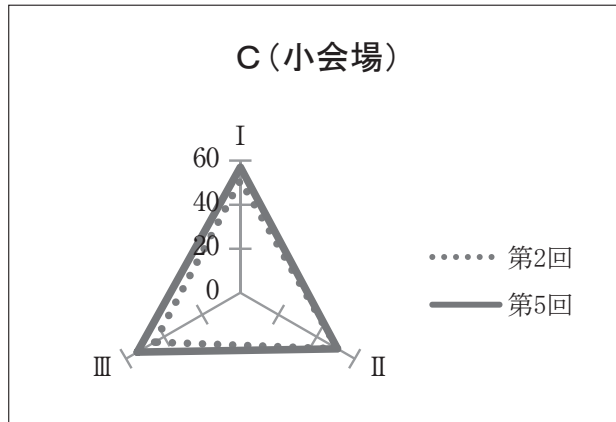


表2では下がっていた「Ⅲ学生生活での学び」カテゴリの点数が上がっていることが分かる。個々の質問においても、「身体表現に関する技術が身についた」は点数が上がり、「音楽表現に関する技術が身についた」では同点だった。これらのことから、学生Cは大会場より、小会場の方が力を発揮できたのではないかと考えられる。さらに、学生Cの各アンケートの自由記述欄の確認をした。

- ・ポケモンの手遊びを保育園の先生がメモしてくれて嬉しかった。
- ・今まで参加したボランティアの中では子どもたちの反応が鈍かったように感じたが、踊りの時とふれあい遊びの時はとても元気に参加してくれたので嬉しかった。

とあり、先生や子どもの様子に目を向けることができていた。小会場でのあつぶるのボランティア活動は、参加学生も7名と少人数で、会場も小さかったので、学生と子ども達の距離も近かった。そのため学生1人ひとりの力量が問われ、役割分担も多くなった。学生Cは主体的

に動くより、周りについて行くタイプであるが、これらのことから、大会場より小会場での活動の方が、より自分の力を発揮でき、学生自身の意識変容に繋がったと考えられる。

また学生Fは「Ⅱ自己の成長」カテゴリと、「Ⅲ学校生活での学び」カテゴリ両方において点数が下がった(グラフ3, グラフ5)。学生Fの2つのカテゴリにおいて、点数が下がった原因を追求した。下がった項目は、「プログラムを終えて達成感を感じた」「もっと関わりたいという意欲がでた」である。学生Fは男子で、1年次から公演には何度も参加していたが、練習にはあまり出ず、主体性を持って関わっていなかった。それらが公演後の達成感を低くし、意識変容に繋がらなかったのではないかと考えられる。

ボランティア活動は、自発的な意志と心が伴うことが前提条件となり、実践するものである。そこには、様々な性格が要求され、自分の知識、技能、労力などを提供することとなる。特に大学生が、ボランティア活動をする事によって、自分の抱えている関心事が、どれだけ重大かまた確実なものかを試すことにも役立っている。また多くの学生は、個人的な満足と楽しみのために活動していると思われる。

まとめと今後の課題

2年間にわたり、あつぶるのボランティア活動を継続して行った学生の多くは、現場に役立つ力、学生自身の成長、学校生活などで意識変容が見られた。学生達は、これらの経験を通して、分野ごとに大学で学んだことを確認していると思われる。これらの経験を卒業後に現場で生かすと同時に、自己課題を見つけ、自分で学ぶ糧としてほしいと願う。

今後の課題として、あつぶるのボランティア活動を行った卒業生に対して、どのように現場で生かされているか追跡調査・研究を行う。

稿を終えるにあたり、本研究に関して、協力して下さった各施設関係者・本学保育学科教員・学生に対し、心から感謝申し上げます。

参 考 文 献

- ・松井みさ 谷本満江「ボランティア活動における学生の意識変容について(2)」全国保育士養成協議会第49回研究大会研究発表論文集 2010
- ・松井みさ 大橋美佐子 谷本満江「ボランティア活動における学生の意識変容について」全国保育士養成協議会第47回研究大会研究発表論文集 2008
- ・松井みさ 大橋美佐子 谷本満江「ボランティア活動における学生の意識変容について(1)」中国学園紀要第8号 p71-75 2009
- ・本田尚士 「ボランティア活動へのいざない」建帛社 1993
- ・ハータ・ローザ 柴田善守監訳 「女性の職業とボランティア活動」相川書房 1979